

【にんげん部門（高校生の部）・優秀賞】

主観という霧

京都光華高等学校 3年 東野 桃子

私は生き物の中でも特に虫が好きで、みんなが怖いというオオスズメバチでさえ、姉御みたいでかっこいいし、かわいいと言って友達ビックリされたことがある。そんな私は道端に小さな虫を見つけたらすぐに立ち止まったり、座ったりするものだから、周りから変な目で見られることもしばしば。ある時から友達や同年代の人はメイクや推しのお話をするのを見て、自分と周りが違うことが気になるようになった。日々悶々とする中で、昼休みに一緒にご飯を食べているうちの一人の友達が「虫って怖いけど、桃ちゃんが話してるのを聞いてから、かわいいと思うこともあるんだよね。」と何気なくぼつりと言った。その言葉に私は驚きを隠せなかった。何せ、私の話で虫が嫌いな人が可愛いと思えるようになった事に加えて、自分が周りと違うことを気にしていたのは私の方だったのかもしれない気が付いたから。友達は私を私として見てくれている。心の突っかかった何かがスッと取れた気がした。それから自分を隠さずに過ごすようにしていると、段々と周りの雰囲気も変わっていくような気がした。何人もの友達が今日はこんな虫がいたよ、なんて連絡をくれる。関わりがなかった学校のクラスの人も虫好きなん？と話しかけてくれるようになった。そして、習い事の帰り道、電車で迷い込んだ黄蝶を外に出している女性が目に入った。同じような人がいたという安心感と同時に、友達が言ったあの一言がなかったら、目に映ることすらなかったのだろうなと思った。自分らしくいていい、これが自分なんだと気付いた時、人は視界が開けるんだと感じた。前までの私は周り見て自分を見失っていたけれど、それは“私の主観が入った周り”だった。悩むからこそ人生の答えや豊さを知るきっかけとなるんだろうと今となって分かってきたような気がする。そう考えると人間という生き物が面白いなと思った。